The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宮地嚴夫による平田国学の改良について
Author(s)	黒田，宗篤
Citation	大阪大学言語文化学. 2013, 22, p. 3-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77766
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

宮地嚴夫による平田国学の改良について*

黒田　宗篤**

キーワード：宮地嚴夫、平田国学、「大教法」構想

In the face of Japanese society's modernization and internationalization at the end of the nineteenth century, how did the school of Shintō nativism propounded by Hirata Atsutane transform itself to accommodate the new era? This thesis is a study of the conditions surrounding the writings of Miyachi Izuo, known as the authority of Shintō during the Meiji and Taishō periods, who became a disciple of the Hirata School in 1867.

Hirata nativism, which greatly influenced the realization of the Meiji Restoration (*ishin*), was an ideological school that sought to reconcile the ancient traditions of the world around Shintō scripture, and elucidate Japan's mytho-historical traditions within the framework of global history. However, within less than a decade of the Restoration, the ideology had fallen into decline, criticized for its circular reasoning. This was a result of the ineffectiveness of its successors. The transmission of Hirata nativism required both interdisciplinary learning as well as a hermeneutic mastery not only of Shintō scripture but also of the highly regarded secrets of the neo-Taoist "study of mystery" (*gengaku,* Ch. *hsuan-hsueh*). Without any candidates to fill these desiderata, its scholarly stagnation was inescapable.

Against the backdrop of both Christian proselytism and the rise of the Freedom and People's Rights Movement, Miyachi Izuo, a government educator, perceived the necessity of reforming Hirata nativism. With the help of Miyachi Yoriki, he interpreted the neo-Taoist tradition and introduced a social evolutionism into Hirata nativism to help it accommodate the new era. The resulting theory of Shintō, while retaining the chief spirit of Hirata nativism, engaged with the ideologies and religions of all the countries and ages of the world, enabling its acceptance by a future, global humanity. Although Miyachi left behind a great number of written lectures in accordance with his own concepts, he died entrusting the completion of his work to his successors.

---

* A Study on Izuo Miyachi's Improvement of Hirata Nativism (KURODA Sotoku)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

Whereas Hirata nativism had previously been chiefly concerned with the hermeneutics of Shintō tradition, the present study argues that in reading a theory of social evolutionism into Hirata nativism to establish an ideology premised upon its acceptance by people of all ideologies and religions, Miyachi Izuo's improvement represented a major shift in its research objectives.

1 はじめに

宮地嚴夫は、宮内省式部職主席掌典兼内務省神社調査委員を務め、明治―大正期の神道界にあって「元老」と呼ばれるほどの権威を有し、その没後においても「千家尊福と双璧をなす大物」[1]（小林1・27頁）であったと評された人物であった。

宮地の著名な業績として、平田篤胤の国学を継承し発展させたこと、明治天皇の大喪の礼、大正天皇の即位の礼を含む宮中祭祀の創定を担当したこと、神社の統廃合、神社法令への関与などが挙げられる。この業績だけでも所謂「国家神道」研究や皇室制度史、近代神道史、近代国学史などといった各分野を研究する上で、検討を要する人物であったことが理解できよう。

ところが、宮地嚴夫に関する学術研究は、史料の散逸が主因となって近年に至るまで僅少であった。研究史を整理すると、小林健三は、初めて学術誌で宮地嚴夫を取り上げ連載形式で発表した。彼は、嚴夫を平田篤胤―宮地常磐―宮地再来の道統継承者として位置づけて「宮地神道」と呼び、その玄学論の解明を試みたが、死去のため序論で中断となった[2]。今日、彼の提唱した道統説は、事実誤認であることが宮地家及び宮道東夫によって指摘されている[3]。次に津城寛文は、鎮魂法研究の一環として宮地嚴夫の鎮魂論に注目したものの[4]、宮地の鎮魂論は、平田篤胤の鎮魂論を踏襲したものという事実に言及せず論を終えている。

これら先行研究における最大の問題は、宮地嚴夫の著作や生涯史に関わる基礎的調査を欠いたまま研究を行ったことにある。このような研究状況であったので、「宮地嚴夫」という重要人物がいたことはわかっていても、その実像は謎のままであった。

そこで筆者は、宮地嚴夫に関する基礎研究を確立すべく、宮地の著作調査を行い、その成果を平成18年の明治維新史学会秋期大会報告「宮地嚴夫の著作と活動」において発表した。従来重複を含めて40作とされていた宮地の著作が、約230作存在していた

---

[1] 本稿における引用及び参考文献は、本文末に掲げる引用文献・参考文献リストに提示した略表記を用い、引用箇所については、（　）内に頁数を提示する。また、基本的に旧漢字は現行漢字に改め、原史料にある片仮名表記は平仮名表記に、振り仮名、傍線、傍点は省略し、句読点は原文のままとした。
[2] 小林の道統論については、（小林1）、玄学論については、（小林2）、（小林3）参照のこと。
[3] 詳しくは、（宮道）参照のこと。
[4] 詳しくは、（津城）参照のこと。

ことを示し、著作リストを公開した。平成23年には、『宮地嚴夫研究1　―その半生について―』を刊行し、宮地の誕生から明治21年までの半生を整理した。残る大きな課題は、後半生と思想活動に関する検討である。本稿においては、未解明となっている宮地の主たる思想活動について検討する。

宮地が仕えた明治政府は、国際化及び近代化政策を急速に推進していった。その結果、科学的知見が重視され、記紀は、「歴史書」から「神話」と見なされるようになり、「神国」のはずの「皇国」は世界の「半開国」との認識が生じるようになった。

神道の尊厳を守るべき立場にあった宮地嚴夫は、「我は教法を改良せんとす教法とは一宗旨にあらす世界の人みな奉すべき所の教法なり」（土佐・1頁）として、平田国学を改良することで新時代に相応しく、世界各国で受容可能な「大教法」の樹立を志した。以下、彼の言説を通してその実態を明らかにしたい。

2　活用されない平田国学

平田篤胤は、「帝道唯一」をもとに各国の神話・古伝説を統合することを目的とした。彼は、自らの計画を実行すべく、全容を示す『古史傳』を中核として『赤縣太古傳』、『印度蔵志』、『本教外編』などの外国の古伝説研究及びそれに付随する個別事例研究を行った。彼が得意とした論法は、広範な分野を学際的に研究して、多角的な視座から学説を定めるという手法であった。このような研究が可能であったのは、「古今五千載之一人」[5]と評された彼の学識に負うところが大きかったといえる。研究範囲が広範にわたっていたことと、幕府による執筆活動停止処分等もあって、篤胤は、『古史傳』をはじめ多くの著作を未完成にしたまま逝去した。

篤胤の国学は、天皇より「天覧叡感」の栄を賜り、全国の神社支配を二分した神祇伯・白川家と神道宗源・吉田家からその学説が公認されるという大きな権威を有していた。明治に入っても、平田国学は、教部省下の神宮教院や皇典講究所などの神道系の教育機関において参照すべき文献として扱われていた。

ところが、それを布教の現場で活用するはずの平田門下生を含む神道教導職たちは、

> 一体是れ迄の神道流は本居平田等を先師として今日の時勢に眼を注かす頗る迂遠論也且当時の神官は多分官員の廃物とかにて一時の活計の為めに其の職を奉ずる徒にて其の精神は彼の西牧師又仏徒の類に非す畢竟するに学識も無く才力もなく平凡の教導職十の八九歩に居れり故に天下の活眼者より見る時は尤も迂遠にて今日無用と認めらるゝなり実に無用也（東京・100～101頁）

[5] 秋田県秋田市手形大沢の平田篤胤の墓石前にある石柱に刻まれた生田萬の評。

との宮地嚴夫の指摘があるように、平田国学を世相に合わせて積極的に改良し活用する努力を怠っていた。そのため、単なる本居国学、平田国学を踏襲するだけの教導では、時代の要請に応えない「迂遠論」と化していったのである。平田国学を継承し改良するには、神道以外にも他分野を学際的にみる広範な知識及び玄学の解明が求められるが、並の力量の教導職では難題であったといえる。

当時、民権運動家や無神論者たちと対峙し、高知県の教導職を監督する立場にあった宮地嚴夫は、この局面を打開するために、篤胤の視座を継承しつつ、新時代に相応しい神道説を樹立することを企画した。彼はそれを「大教法」と呼んでいる。

この構想が公にされた際、「一時宗教社会の物議を起したる程の事なり」といわれ、「兎に角卓越の議論といふべし」（土佐・1頁）と評された。まさに当時にあっては、驚くべき発想であったという。それは社会進化論の一部を平田国学に導入することで、近世国学の発想を根本的に転換させたものであったことによる。その最終構想が、大正3年に出版された『世界太古傳実話』の広告に掲載されているので参考のため全文を掲載する。

> 本書全部約五十冊は宮地先生が博覧強記にして然も豊富なる材料に依り数十年間講究研磨し、宇内の大勢に鑑み古今の実歴に徴し正確なる例証を挙げ世界は遂に統一に帰すべきものなるを論ぜられ、彼古を温ねて新を知り往を推して、来を察すなど云へる古言に基き、我上古の神典を基礎とし世界に所在古伝神話と称するもの迄も参輯して先神明の厳存より天地の開闢、人類の発生、萬物の肇始、中にも我皇室の天壌と与に無窮なる所以猶且人間の霊魂と肉体とに関する解釈及び其の生死の理または神魂帰着のこと等に至るまで凡人たるもの、知らむと欲する要点は悉く之れを挙げ逐一之れが題を設け各々一度の講話となるべく極めて平易の語を用ひて談話体に筆記せられたるものなれば、之れを読みて自ら其要を会得せらるゝは勿論或は聴衆を集めて読聞すれば即ち一席の談話となりて神道に関する著書少なかざる中にも斯道を広むる為に斯の如き便宜を得る書は無かるべし。今回先生に請ひて許諾を得たれば順次号を追ひて一冊づゝ印刷に附し同志の諸君に分たむとす。乞う続々購読あらむこと（宮地7・頁数無し）

3　宮地嚴夫の国学改良論

3．1　『世界太古傳実話』の原案

『世界太古傳実話』は、宮地嚴夫の「数十年間講究研磨」（前掲）の成果であった。換言するならば、大正3年からみて数十年前に企画されたものということになる。

宮地神社によると[6]、宮地嚴夫が、歴史書の編纂を企図したとする史料上の初見は、明治10年3月16、17日の宮地嚴夫の『日誌』の記事にあるという。まさに「数十年」前に相当する。嚴夫が親族の宮地再来に「大地球全書」という「太古、中古、今世」の歴史書編纂の協力を要請し、賛同を得たという内容であるという。詳述されていないため詳細は不明とのことであるが、「大地球」という表現から、地球全体の歴史を一纏めにしようという壮大な構想であったことがわかる。

篤胤は、古道学を講究する上で教条よりも、賢しらを加えない歴史叙述の中から神道を知るべきだとした。よって、篤胤が主著としたのは『古史傳』であった。平田国学を専攻する嚴夫が、篤胤が失意の内に中断した『古史傳』を発展的に継承し、完成させようと志したのは、自然の成り行きであったといえる。

それでは何故、嚴夫は、再来に協力を要請したのか。再来は、号を水位といい、潮江天満宮の神主職（宮司）世襲家の神官で、18人の師の下で文武16科を学び、神道、仏教、道教、医学、天文、地理、暦、鉱山、昆虫、植物等の諸分野に精通し、生涯で250種、500冊の著述を成した高知県を代表する碩学であった。再来は、若くして平田国学の補完、発展を志し、特に玄学研究については、嚴夫が驚くほどの専門知識を有していた[7]。

当時の宮地嚴夫が、平田国学を継承する上で最も苦心したのは、玄学の解明であった[8]。篤胤は、「仙経として高く評価して、神典の次に位を与えていた」（彌高・72頁）との指摘があるように、海外の諸宗教の中でも「玄学」を重視した。篤胤は、「宗には老子の伝へし玄道の本は、我が皇神たちの、早く彼処に授與ひし道にして」（平田2・364頁）と述べ、玄学の起源を神道と見なした。そのため、玄学に精通しなければ、篤胤の国学を引き継ぐことは困難であった。

さらに、篤胤は、玄学を信仰していたが故に、玄家の道戒にも忠実であった。彼が「仙翁」と尊び慕った葛洪の『抱朴子』には、「夫道家は、仙術を宝秘す。弟子の中すら、尤も簡択を尚び、至精弥久しうして、然る後に之に告ぐるに要訣を以てす。」（石島・211頁）とある。彼もこれに倣って、玄学に関する重要な事項は、「右者自非篤志無倫古学有功之人莫伝焉者也」（国立・14頁）として容易に伝授しないとした。特に玄学の機密に属する隠語や仙丹の製法等の解読結果については、秘して各自の自得を求めた[9]。これらの内容は、「固より遂に神位に至るべき道骨の人に。その啓発すべき期を量りて。伝ふべき法なりと所思ゆる」（平田4・232頁）という性質のものであるという。「神位に至るべき道骨の人」などそうはいない。

---

[6] 宮地神社（高知県高知市）への聞き取り調査による。社宝の『日誌』は、非公開となっている。
[7] （高知）353頁、及び（拙著）84頁参照。宮地再来が行った研究の詳細については、（拙稿）参照のこと。
[8] 苦心の様子については、（拙著）82～85頁参照のこと。
[9] （平田3）811頁参照。

よって、平田国学の核心に迫ろうとすると、博学の篤胤が「素読千扁する者と云へども、容易に其ノ意を得ること能はず」（平田3・811頁）と悪戦苦闘した玄書を自力で解読する必要があった。嚴夫は、この玄学の解読に苦労していたのである。

嚴夫は、再来の協力を得ることで玄学の問題を解決することができた。後に嚴夫は、玄学研究の成果を『本朝神仙記傳』に纏め、彼の指示通りに学べば、篤胤が秘訣とした内容を解けるように記述した。

3. 2　宮地嚴夫による社会進化論の導入

宮地嚴夫は、少なくとも明治10年頃には、「大地球全書」と呼ばれる歴史書を企画していた。それでは、平田国学に社会進化論を導入するという案は、いつ頃思いついたのか。彼は、明治19年10月に行った「奉教自由ノ真意」という演説の中で、スペンサー（Herbert Spencer, 1820 − 1903）の社会進化論に言及しつつ、人類の交際範囲拡大と社会の進化に伴って宗教は改良されていき、最終的に世界の宗教は「帰一」すると述べた。彼は、同演説で「本年三月以来井生村楼神保園又厚生会館等にて次々申し述べました通り如何に文明の極に達し」（宮地1・10頁）と述べているので、少なくとも明治19年3月迄には、社会進化論による平田国学の改良を構想していたと考えられる。

宮地は演説の中で「今日の如き世界の各国が一家の如く交際親密なるに至ては如斯宗旨が各種になりて居ては国家に大害は有ても公益は決してありません 其所で人智が進むに随ひ此至要の点に眼が着来て之が改良を計ることに成り遂に一に帰せさるを得さるに至ること必す疑ひはありません 夫は何故なれは彼聖人預言者等が教を設けたる其本拠は一に人類の良心に基きたるものにて 其良心には各種あるへき筈なきを以て実の人智が進歩せし時は誰が見ても善は善悪は悪と確定するに相違ありませんで其時始て宗教帰一の時に達します」（宮地1・12頁）と述べ、「少し違て居れども其意は従来私の説所と少しも相違有ませぬ」（宮地2・9頁）と従来からの自説がスペンサーの社会進化論とほぼ同じ発想だとしつつも、帰結については、「唯スペンセルは遂に世界の人が特一神を見出し一に之を信ずるに至ると云を以て其極点として居ますれど是丈は私と大いに見解を殊に致します 私の見所は従来屡々申述たる通り統括の上より云へば一神で有ますれど分掌の上より云へば必ず多神で有に相違有ませぬ」（宮地2・8頁）とその違いを強調した。多神教の神道家である宮地にとっては当然の主張といえる。

明治19年以前に日本で出版されたスペンサーの著作を調査すると、「宗教は時の古今に依て開不開の別ある」（S2・134頁）といった見解や「霊妙不思議なりと信するの一点に至ては古今各宗教の一徹して動かさる所なるを以て見れば万物の大本を霊妙不思議の物なりとする」（S1・135頁）を宗教の「極意」とする説明があり、宮地が参照して

いた形跡がある。但し、彼は、スペンサーの理論全体を受容していたわけではない。

例えば、「奉教自由ノ真意」演説において、各時代の聖人が宗教を進化させるという見解が示されているが、実際のスペンサーの著書には、「人類の進化既に極に達するに迫んで而して後始めて彼聖人君子の在るへき」（S2・83～84頁）とあるなど、個々の見解に異なる部分が多く見られた。

部分受容を構わないとする発想を可能にしたのは、平田国学に「和漢万国才」という役に立つものは何でも利用するという発想があったことによると考えられる[10]。

問題は、「従来私の説所と少しも相違有ませぬ」（宮地2·9頁）とあるように、宮地が、スペンサーの著作に接触する以前に社会進化論に近い発想を自力で得ていたのかという点であろう。これについては、宮地本人の証言以外に証拠となるものがなく、史料上の制約により検証は困難であった。

ただ、全ての思想や宗教が「特一神」、「霊妙不思議」に帰するという発想については、平田国学にもある。キリスト教におけるGODの存在を知っていた篤胤は、それを隠しつつ、天之御中主神を道教の最高神である「上皇太一」や老子の「一」と同じ存在であるとした[11]。そこから、天之御中主神は、霊妙不思議の霊徳を持つ根源神として解釈された。スペンサーの想定とは意味を異にするが、全ての宗教における「真理」に相当するものが「一」に帰するという発想自体は、スペンサーを知る以前から、宮地が知っていても不思議ではない。

宮地が平田国学に社会進化論を導入したことで、近世以来の国学研究の方向が大きく変化した。本居宣長は、人為による儒仏的要素を排除し、純粋な日本の神代を明らかにしようとして古事記を研究した。平田篤胤は、記紀の天地創造の記述に注目し、天地は世界共通のものであるので、外国にも「神伝」の歴史が残っていると考えた。そこで、各国の神話の中から人為による部分を取り除き、統合していけば、宇宙創造以来の高天原の様相を復元できるとして研究を行った。要するに、近世国学は、「神代」という過去を知るための研究だったのである。

ところが、宮地厳夫の構想は、文明の進化に伴って世界の思想・宗教が淘汰されることで、天之御中主神を起源とする神の秩序に収斂していくという発想であった。よって、人為であっても不完全ながらも神の秩序を含んでいるとする古今東西の思想・宗教は部分受容の対象となり、そこに含有する神の秩序の破片を合わせることで人類共通の「大教法」が完成すると考えた。つまり、宮地厳夫は、過去を知るための学問であった国学を、未来を知るための学問に転換させたと評価できる。

---

[10] 詳しくは、（平田1）14～15頁参照のこと。
[11] （平田2）359～385頁参照。

4　国学改良論発表後の宮地嚴夫の著述活動と結末

4. 1 「大教法」成立に向けての創意工夫

宮地嚴夫は、公務の余暇を利用して自身の計画を実行に移した。彼は、「大教法」構想を具現化する『世界太古傳実話』発刊に至る過程で、様々な試みを行った。その事例を幾つか紹介しよう。

明治19年以後の宮地の著作を調査すると、彼は、「君主論」、「葦原中国は全世界の古名なり」、「宇内統一の前表」、「生死の説」、「魂と魄との話」といった後の『世界太古傳実話』の構想に関係する内容を講演及び講演録で発表している。ここから、彼は、まず個別のテーマ毎に講演録を作成して、最終的に『世界太古傳実話』として纏める意図であったことがわかる。

そもそも、『世界太古傳実話』が、「凡人たるもの、知らむと欲する要点は悉く之れを挙げ逐一之れが題を設け各々一度の講話となるべく極めて平易の語を用ひて談話体に筆記せられたるものなれば」（宮地7・頁数無し）と意図的に講演録の集成としたのには理由がある。

宮地は、「神道普及の方法に就て」という講演の中で、仏教の教導を「般若経でも三部経でも其他の諸経何に限らず、誠に解り易く通俗的に解釈して、中には絵などを挿みて、誰れが見ても、女子供にも能く解るやうなものが沢山」（宮地5・12～13頁）と述べて高く評価し、キリスト教についても、ケレドノオラシヨを用いたキリスト教の布教方法は優れているとして、「少し耶蘇教で教へる真似をする様では有りますけれど」（宮地5･14頁）とキリスト教を見習って、神道を説くようにと勧めている。そして彼は、「極めて通俗的にして、早分りのする書を作るが、第一肝要の方法」（宮地5・12頁）と結論づけている。『世界太古傳実話』には、この構想が採用されている。さらに、「逐一之れが題を設け各々一度の講話となるべく」（宮地7・頁数無し）としたのは、「聴衆を集めて読聞すれば即ち一席の談話となりて」（宮地7・頁数無し）とする教導の現場で使えるように配慮したことによる。

平田国学の説明にも工夫を凝らした。例えば、篤胤は、本居宣長の「天照らす神の授けし真白玉。ひかり見ねばや人の知らなく」（平田4・351頁）という和歌に対して

> 抑人の精神は。もと天津神より賜はりたる物なれば。我物ながらも。人々大切に。尊抱敬持すべき事なるを。其ノ真玉よ。元より身体の内に在て。眼に見ざる故にや。麁略に思ひて。穢悪にふれたるをも。祓ひ清めむとせず浮れ彷徨ふをも。招き鎮めむとせず、謂ゆる真一の道を守りて。心法修行すべき理をしらざるか。（平田4・351頁）

という解説を行った。鎮魂祭の鎮魂法と道教における「真一の道」が同じだと暗に示し

ている部分である。平田家の道統礼式にある「鎮魂祭式　真一成神之伝」（国立・14頁）に相当するものとみてよい。

宮地は、「神人感合説」の中でこの学説を継承しつつ、中江兆民の『理学鉤玄』（1886年）の中から「エキスターズ法」の記事を見つけ出し、「エキスターズ法」と日本の鎮魂法、中国の内観法、仏教の禅定はその本質において共通であると説明した。さらに、時勢に配慮して「現今の青年諸君には先に日本の事をお話しても到底悦ばれませぬ。些と可笑しい様な事でも西洋流にやると、彼は中々学問が有るとか知識ぢやとか云ふて悦んで聴いて居られるのが世間普通であります」（宮地8・1頁）と述べて、「エキスターズ法」の説明を中心にしつつ、鎮魂法の説明を行った。

『国体と神道』では、平田国学だけではなく、地引順治による「彼の理学の原則の、中心力、遠心力、求心力と申すも、実は此の天之御中主神、高皇産霊神、神皇産霊神の御三方の御霊徳が一切の事物に、具備して居ざるもの無きが真理の上に顕はれたるを、理学の原則とは申すと見えます」（宮地6・11頁）という最新の学説も採用している。紙面の都合上省略せざるを得ないが、国会の起源を記紀に求めるなど[12]、新時代を意識した神典の再解釈も試みた。

4．2　『世界太古傳実話』の執筆上の問題と結末

宮地厳夫は、様々な創意工夫を凝らして新時代に対応する国学を示そうとしていた。だが、計画を遂行する上で克服しなくてはならない根本的な問題が存在していた。

宮地が最も苦慮したのは、無神論の問題であった。彼は、「学問の変遷から若し無神論にでも成て仕舞やうの事でも有つたならば、此の我国家の基礎が破れて、諸外国と何むの選ぶ所の無い国と成て仕舞ひます、実に我国に取て此上の不都合は有るまいと思ひます」（宮地4・38頁）と述べ危機感を抱いていた。この問題は、天皇及び神道の存在意義に直接関わる。彼の場合、科学に関して専門的な知識を有していなかったので、ダーウィンの進化論をはじめ無神論につながる思想を直接論破するという手法はとらず、有神論の証拠となるような逸話を集めることで反論とした。それが、『日清戦争天佑紀聞』（1904年）と『本朝神仙記傳』である。

『日清戦争天佑紀聞』は、日清戦争時に起ったとされる霊異現象に関する逸話を当時の新聞記事や現地に行った軍人から聞き集めて編纂したものである。『本朝神仙記傳』は、玄学研究の集成という目的の他に、「今神と云ふ方から言ってみると、頑固、固陋の人を代表するやうになりますから、又神と云ふことでは人が見ぬかも知れぬから、仙人と

---

[12]（宮地6）21～22頁参照。

か、神仙と云ふことで、耳新しいことであると見るかも知れぬ」（宮地 9・333 頁）として纏めたもので、神仙が存在するのであれば、神祇の実在も類推できるとして編集したものである。彼の執筆当時にあっては、『日清戦争天佑紀聞』は、現今における有神論の証明、『本朝神仙記傳』は歴史上における有神論の証明を試みたものとして位置づけることができよう。

また社会進化論の導入によって、あらゆる思想を検討対象にできることになったが、この作業は実質上困難であった。彼は、明治会[13]の趣旨説明において、外国由来の思想文化を奉じる「欧州主義」と保守主義の「日本主義」とは、そもそも「本邦を思ふの本心に於てハ。毫も差異なきもの」（宮地 3・16 頁）なのだから、お互いに譲歩して、東聖西哲が一致するところの道徳の真理にかなう「純然たる有為活発の日本主義」（宮地 3・17 頁）の実現を提案し、それを目的とするのが明治会であるとした[14]。だが、明治 30 年代初には会の勢いが衰え、解散を余儀なくされた。双方に共通する事項を取り出して説得するという手法だけでは、大衆の支持を得られなかったとみるべきであろう。

さらに宮地の「大教法」構想を実現するためには、膨大な時間を要するが、彼は多忙に過ぎた。彼は、肉体の酷使が原因で腎不全を引き起こし逝去した。そのため、『世界太古傳実話』は、第 1 巻のみが刊行され、残りは中断に終わっている。

彼は、第 1 巻発刊の段階で、自身に時間がないことを予見していた。本文の中に「就ては必ず然るべき大知識を具へたる、大人物が世に生れ来て、実際之れを為すで有りませうが、然り迚指を口にして、其人の出るのを待て居る譯には参りませぬ、誰にても此れに気の付きたる人が、着手するべきか当然であります」（宮地 7・30 頁）とある。つまり、実質上後世にその事業を託す考えであった事がわかる。

宮地は、平田国学改良の概要を示し、その考えに基づいて執筆した数々の講演録を残した。そして、実現できなかった部分は後世に託すと考えたからこそ『世界太古傳実話』が完結していなくても「よのために なすべき事の あらましを なしえてのちに ゆくもよしかな」（大久保・43 頁）と臨終の場で詠んだのである。

5　おわりに

本稿の検討を通して、宮地嚴夫の主たる思想活動、即ち「大教法」構想の一端が明らかになった。宮地は、教導の現場の経験を通して「過去」の「神代」を明らかにするという近世国学の発想だけでは時代の要請に応えないことを知った。

---

[13] 明治 21 年に敬神・愛国・尊王を主精神とした国家的学術を講究することを目的に設立された会。全国各地に支部を持ち、講演活動及び機関誌『明治會叢誌』を刊行した。宮地嚴夫は、幹事であった。
[14]（宮地 3）12 ～ 18 頁参照。

そこで彼は、文明が進化していく中で人類の思想・宗教が「一」に帰すという社会進化論の発想を平田国学に導入することで、近世国学の「過去」を追求するという発想を「未来」における神の秩序を明らかにする国学へと発想を転換させた。彼が、社会進化論の発想を導入できたのは、天之御中主神を根源神とする平田国学の発想を継承してこそであった。

国学研究の方向が変わったことによって、宮地は、「神伝」に限定された研究作業から解放され、入手可能な古今東西の思想・宗教の全てが検討対象となった。

宮地は、自身の計画に従って多数の講演録を作り、最終的に『世界太古傳実話』として纏めようとしたが、間に合わなかった。そこで彼は、思想の根幹となる平田国学を継承できるように、『本朝神仙記傳』において玄学の解明に至る指示を残し、平田国学の改良計画と講演録を残すことで、後世に「大教法」構想を託した。

以上が本稿の検討によって明らかになった宮地厳夫の平田国学改良に関する試みの全容である。宮地厳夫の基礎研究としては、彼の思想研究の欠の一部を埋め合わせたことになる。今後の課題として、紙面の都合上省略しなければならなかった部分の解明も含めて研究を継続し、隣接分野に本研究の成果を組み入れたい。

●引用文献・参考文献リスト

（石島）石島快隆訳注『抱朴子』岩波書店（1942 年）。

（彌高）彌高神社平田篤胤佐藤信淵研究所編集発行『平田篤胤大人図集』（1994 年）。

（大久保）大久保青素「宮地厳夫先生の小傳　附たり逸話」宮地厳夫著･宮地青丘編『本朝神仙記傳』朱鳥社（2001 年）。

（神崎）神崎一作「本朝神仙記傳序」前掲『本朝神仙記傳』。

（高知）高知県人名事典編纂委員会編『高知県人名事典』高知市民図書館（1971 年）。

（国立）国立歴史民俗博物館編、同所刊行『明治維新と平田国学』（2004 年）。

（小林 1）小林健三『平田神道の研究』古神道仙法教本庁（1975 年）。

（小林 2）小林健三「東嶽　宮地厳夫の玄学研究　―主著『本朝神仙記伝』を中心として―」『神道研究紀要　[第四輯]』加藤玄智博士記念学会（1979 年）。

（小林 3）小林健三「東嶽　宮地厳夫の玄学研究（第二回）―主著『本朝神仙記伝』を中心として―」『神道研究紀要　[第五輯]』加藤玄智博士記念学会（1981 年）。

（拙著）拙著『宮地厳夫研究 1　―その半生について―』玉廼舎塾（2011 年）。

（拙稿）拙稿「潮江天満宮神主・宮地常磐、再来の学術研究」『東洋文化　第 109 号』無窮会（2012 年）。

（津城）津城寛文『鎮魂行法論 ―近代神道世界の霊魂論と身体論―』春秋社（1990 年）。

(東京) 東京大学史料編纂所『保古飛呂比　佐佐木高行日記十』東京大学出版会 (1978 年)。
(土佐) 氏名不詳「宮地氏演説の大要 (三)」『土佐の海　第 24 号』(1898 年)。
(平田 1) 平田篤胤「古道大意上」平田篤胤全集刊行会編『新修　平田篤胤全集　第 8 巻』名著出版 (1976 年)。
(平田 2) 平田篤胤「赤縣太古傳　巻之一」前掲『新修　平田篤胤全集　第 8 巻』。
(平田 3) 平田篤胤「黄帝傳記　中巻稿」前掲『新修　平田篤胤全集　第 8 巻』。
(平田 4) 平田篤胤「玉襷」平田篤胤全集刊行会編『新修　平田篤胤全集　第 6 巻』名著出版 (1997 年)。
(星野) 星野輝興「平田翁最後の御目的」『國學院雑誌　第 39 巻第 9 号』(1932 年)。
(宮地 1) 宮地嚴夫「奉教自由の真意」『教報　第 2 号』(1886 年)。
(宮地 2) 宮地嚴夫「奉教自由の真意」『教報　第 6 号』(1886 年)。
(宮地 3) 宮地嚴夫「明治会の今日に必要なる所以を明かす」『明治会叢誌　第 4 号』(1888 年)。
(宮地 4) 宮地嚴夫「神仙の存在に就て」『全国神職会会報　第 138 号』(1910 年)。
(宮地 5) 宮地嚴夫「神道普及の方法に就て」『全国神職会会報　第 169 号』(1912 年)。
(宮地 6) 宮地嚴夫『国体と神道 (外人の問に答へたる神道)』(1912 年)。
(宮地 7) 宮地嚴夫『世界太古傳実話』(1914 年)。
(宮地 8) 宮地嚴夫「神人感合説 (上)」『神仙道　第 26 号』神仙道発行所 (1952 年)。
(宮地 9) 宮地嚴夫「神仙談」宮地青丘監修・宮地神道文献刊行会編『宮地神道大系　第 1 巻』宮地神社奉賛会 (1991 年)。
(宮道) 宮道東夫『玄学のガイドライン　動機編Ⅲ　―宮地神仙道道統論の虚構―』玉廼舎塾 (平成 21 年)。
(S1) 斯辺鎖 (スペンサー) 著、山口松五郎訳『哲学原理. 上巻之 1-3』(1884 年)。
(S2) 斯辺鎖著、山口松五郎訳『道徳之原理』(1884 年)。